

— 実践報告 —

演習から実習へ看護実践力の向上をめざす教育実践

令和3年度看護学OSCE実施に向けた取り組み

河村 奈美子¹⁾, 喜多 伸幸¹⁾, 山木 照子¹⁾, 伊藤 美樹子¹⁾, 桑田 弘美¹⁾, 立岡 弓子¹⁾,
宮松 直美¹⁾, 辻村 真由子¹⁾, 荻田 美穂子¹⁾, 相見 良成¹⁾, 佐々木 雅也¹⁾, 輿水 めぐみ¹⁾,
土川 祥¹⁾, 片寄 亮¹⁾, 川原 瑞希¹⁾, 坂本 真優¹⁾, 炭本 佑佳¹⁾, 田渕 紗也加¹⁾,
山下 敬¹⁾, 津田 知子¹⁾, 清原 麻衣子¹⁾, 谷浦 直子²⁾, 向所 賢一²⁾

1) 滋賀医科大学医学部看護学科

2) 滋賀医科大学医学・看護学教育センター

抄録: 本論文の目的は、看護学科のカリキュラム上新たな試みである看護学 OSCE の実施に関して、前年度のリハーサルから令和3年度の看護学 OSCE の実施について報告することであり、この報告を踏まえ、次年度以降の実施に向けての検討資料とすることである。令和2年度は看護学 OSCE リハーサルを実施した。受験学生は領域別実習の半分からすべて終了した3回生からボランティアを募り12名が受験した。このリハーサル及び看護学 OSCE には看護学科教員全員、医学・看護学教育センター教員が参画し、さらに模擬患者役として大学院生や学生等の協力を得た。リハーサルにおいては、運営方法全般、評価方法、課題の難易度の確認について、各教員が確認し、さらには領域が作成する学生に提示する課題の確認や検討をし、ボランティア学生からも感想を得た。この結果を踏まえて、令和3年度の看護学 OSCE を実施した。学生の受験の評価としておおむね、目的であった自己の課題に気づくことについて述べられており、目的は達成していると考えられる。今後より円滑で効果的な実習に向け改善や評価方法を検討する必要がある。

キーワード: 看護学教育、シミュレーション、OSCE、演習、実践力

はじめに

平成4年に、「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の施行等を契機に、看護学系大学の開設が急増し、令和3年には、290校が看護学系学部を有している^[1]。この急増の中で、文部科学省より平成23年に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」により「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」が提言され、学士課程で養成される看護師の看護実践に必要な5つの能力群とそれらの能力群を構成する20の看護実践能力を明示された^[2]。同年に厚生労働省からも、「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」提言された^[3]。その後、少子高齢化における社会の変遷と地域医療の改革等の社会的ニーズに対応できる看護師養成の必要性から、実践能力の育成・向上を目指す学士課程教育の内容の充実が求められている。そのため、平成29年に文部科学省の大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会より平成29年看護学教育モデル・コア・カリキュラムが提言された^[4]。ここにおいてさらには、「看護の視点で科学的探究のできる人材の育成や、特定の専門知

識・技術の教育にとどまらない学士としての批判的・創造的思考力の醸成、専門職としての高い倫理性、職業アイデンティティの確立、研究や臨床で求められる情報収集能力、読解力の養成、対人関係形成能力の基礎となる、自らをよく知り、自己を深く振り返る内省、自己洞察能力の強化」について取り組むことの期待についても明示されている。これをうけ、各大学においては、アクティブラーニング、シミュレーション教育、臨地実習の方法や学修状況に関する評価手法、これらに関する教員へのファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development<FD>) の工夫と方法論の確立等の取り組みが期待されている。

滋賀医科大学医学部看護学科においても、この方針によりカリキュラムを改訂し、平成31年度入学生より新カリキュラムを適用している。このカリキュラム改定により、1~4学年までの倫理教育の充実をはかる科目(特に1~4学年では医療・看護の臨床における倫理観を養う)と看護実践能力の向上に向けた新たな科目(3学年:看護実践特別演習、4学年:看護統合実践特論)を整備し配置した。

Received: December 6, 2021 Accepted: January 24, 2022

Correspondence: 滋賀医科大学医学部看護学科 河村 奈美子

〒520-2192 大津市瀬田月輪町 namy@belle.shiga-med.ac.jp

この看護実践特別演習は看護専門科目の経験に加えるコミュニケーション技術、臨床推論を学習し、最終試験（看護学 OSCE: Objective Structured Clinical Examination、以下 OSCE とする）の受験を課している。この本学の看護学 OSCE には、看護学科全教員が参画し、該当学年の前年に相当する令和2年度に OSCE リハーサルを実施し、令和3年度に看護学 OSCE を実施した。

目的

看護学科のカリキュラム上新たな試みである看護学 OSCE リハーサル及び看護学 OSCE 実施について報告することである。この報告を踏まえ、次年度以降の実施の検討資料としたいと考えている。

実施方法

滋賀医科大学における「看護学 OSCE」

国内において OSCE は医学教育で開始され、2010 年以降看護学教育においても取り組まれ始めた。2011 年に中村により「看護 OSCE」という著書も発刊されており^[5]、この頃よりシミュレーション教育や OSCE に取り組む教育機関も増えてきている。本学科においてもシミュレーション教育には既に専門領域の演習科目の中で取り組んでいる領域もある。そのため、看護学 OSCE では演習から実習に向けて、さらなるリアリティのある状況設定の中で学生自身が看護に必要とされる問題解決能力としての思考や判断、技術について、自己の到達度を確認するとともに、具体的な自己の学習課題に取り組むことができることを目的として位置付けた。図1.に新カリキュラムにおける実践力維持・往生に向けた学習科目の配置づけのイメージを示す。

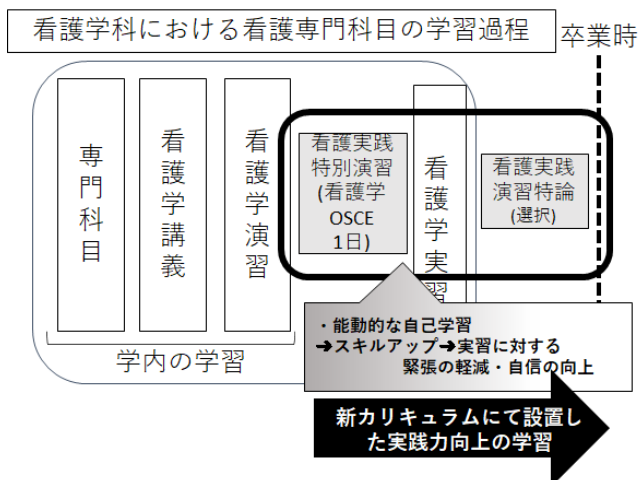


図1. 新カリキュラムにおける実践力維持・往生に向けた学習科目（看護実践特別演習・看護実践演習特論）の配置づけのイメージ。

結果

リハーサルと看護学 OSCE の実施の試み

令和3年度の看護学 OSCE 実施に向けて、看護学科の全教員および医学・看護学教育センターの数名の教員が課題作成・評価方法・運営を担い、1日という短時間での実施に向けてほぼ当日同様のスケジュールにてリハーサルを実施し改善し令和3年度の看護学 OSCE に臨んだ。それに向け令和2年9月より月1回の会議にて準備状況、デモ動画を作成し共有し準備を進めた。本学科の看護学 OSCE は、中村^[5]による『看護学 OSCE』を参考にし、学生・教員の負担や日程確保の制限を考慮し講評までを含み1日間で実施した。

(1) 看護学 OSCE リハーサルの実施

- a. 日時：令和2年3月19日（金）9:30～12:10
- b. 実施内容

設定科目：領域別実習のある科目5領域（成人・老年・小児・母性・精神）（全学生が共通に履修する実習科目）（訪問看護学領域は教授着任直後のため非実施）
各課題は、当該看護専門科目の講義・演習にて既に学生が学修している内容を踏まえて実施が可能であると想定される内容においてそれぞれの専門領域の教員が作成した。課題文の例を図2.に示す。

滋賀ビワコさん、30代、女性
滋賀さんは、△△症の患者さんです。
(課題文) …
課題：○○をしてください。
時間は7分間です。

図2. 学生に提示する課題文の例

評価：出題領域の教員2名が課題について単独で評価した。評価は学生の行動を0, 1の基準で評価した。模擬患者のフィードバックについては、選択項目を設定し、模擬患者が各回実施直後に回答し、学生の返却用の評価表に掲載した。教員の使用する評価表の例を図3.に示す。

設問番号	設問項目	評価欄	評価基準
1	○○○○挨拶をした		できた:1 できなかった:0
2	自己紹介(名前を言う)をした		できた:1 できなかった:0
3	話すときは……………した		できた:1 できなかった:0

図3. 教員の使用する評価表の例

場所：看護学科棟 3 階実習室 2 部屋、4 階実習室 1 部屋

スケジュール：リハーサル当日のスケジュールは表 1 に示す。

9:30	教員集合、オリエンテーション、準備
10:00	学生集合、オリエンテーション
10:30	試験開始：各試験会場で 4 クール実施
11:19	試験終了、教員は片付け開始
11:30	総評：受験学生、教員参加
11:50	学生は解散・各自アンケート記入、教員は片付け再開
12:10	終了

表 1. リハーサル当日のスケジュール

c. 受験学生：看護学科 3 年生ボランティア学生 12 名
(令和 3 年度看護学 OSCE を受験する対象ではなく、既に一部の実習を経験している学生)

d. 内容：学生は 5 課題のうち、主に 2 課題を受験するようにし、受験科目及び組み合わせは受験時の課題を読む際にわかるようにした。1 課題は、「課題を読む時間」、「課題の実施」、「フィードバック」により構成し、1 課題 10 分程度とした。以下に学生の様子を示す。写真 1 は、看護学 OSCE リハーサルに参加した学生の緊張しながらも、明るい雰囲気の中で受験の時間を待っている様子である。

(以下に示す写真は、すべて学生からの同意を得ているものである。)



写真 1. リハーサルに参加した学生の待機の様子

写真 2～3 は、看護学 OSCE リハーサルの実施の様子である。



写真 2. 課題に取り組む様子

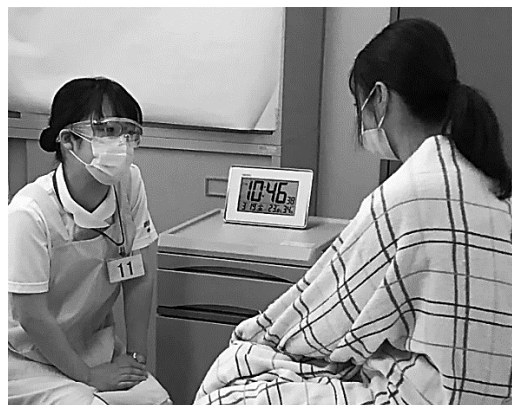


写真 3. 課題に取り組む様子

課題を実施した後、学生は教員からフィードバックを得る。写真 4 は、看護学 OSCE リハーサル終了後の講評である。各領域の教員が課題の出題意図や評価を説明し、医学・看護学教育センター教員より、客観的な評価を得た。課題実施の評価は 1 課題につき、教員 2 名で判定し模擬患者の評価を加えた評価を後日学生個人に返却した。



写真 4. 講評の様子

リハーサルを受験した学生から得られた感想として、抜粋したものを表 2. に示す。

ボランティア学生の感想をまとめると、受験は『緊張もしたが自己の課題にも気づくことができ良かった』、『あたたかいフィードバックをうけられた』、『できたこともあり自己肯定感が上がった』という内容が多く、協力したというだけでなく、受験そのものを肯定的に捉えていると読み取れる感想が 13 件認められた。課題としては、『課題文が長く 1 分で理解するのが精いっぱい』、『課題を忘れてしまった』など 3 件であり、今後の改善課題となった。

受験の感想（全 13 件）

- ・試験では失敗もあったが、試験後のフィードバックを通して今後の課題に気づくとともに、自分ができたことに対して自信を持つことができた。
 - ・実習に行く前に各領域の技術を練習できるいい機会になると思いました。
 - ・実際に患者さんと接するときは事前学習をたくさんするなど知識をある程度持った状態で臨むと思うのですが、自分が何の領域の看護を行うのかわからないままでの実施だったので今の自分のレベルを把握することができました。
 - ・問題文を1分間と限られた時間で読み考えなければならない点や、物品の準備から始めるという点から、実際の病棟実習で看護ケアを行う際に必要な判断力や臨機応変な対応力が求められるためと感じ、実践力を測るためには良い試験であったと思います。
 - ・技術面では全然出来なかったですが、先生方がすごく褒めてくださったので、とても自己肯定感が上がり、「出来なかった。」で終わるのではなく、「今後また勉強、復習をしていこう。」とプラスの気持ちで終わったので良かった。
 - ・受験したことによって自身の未熟さや足りないことがわかったのが今回ボランティアとして参加できて良かったです。
 - ・待機時間やフィードバックの際に、先生方が温かい声をかけてくださり、リラックスして試験に取り組める環境でした。
 - ・実際に患者さんと話す機会がなかったため、いい緊張になった。
- 課題（全 3 件）
- ・課題を読む時間が1分と短いので、長い文章だと読みきれないと感じました。

表 2. 看護学 OSCE リハーサル受験学生の感想の抜粋

(2) 看護学 OSCE の実施

- 日時：令和3年8月6日（金）9:30～16:00
- スケジュール：看護学 OSCE 当日のスケジュールは表3に示す。

9:00	教員集合、オリエンテーション、準備
9:30	学生集合、オリエンテーション
10:00	前半試験開始：各試験会場で6クール実施
12:40	休憩
13:40	後半試験開始：各試験会場で3-4クール実施
15:30	総評（学生、教員参加、ハイブリッド形式）
16:00	学生は解散、教員は後片付け

表 3. 看護学 OSCE 当日のスケジュール

- 受験学生：看護学科3年生58名（看護実践特別演習（必須）の受講学生）
- 設定科目：領域別実習のある科目6領域（成人・老年・小児・母性・精神・訪問）（全学生が共通に履修する実習科目）
- 受験前の学生に対するオリエンテーション：講義の最終回に、看護学 OSCE 受験に関してオリエンテーションを実施した。移動や流れに関する動画、リハーサルの際に受験学生ボランティアから受験する学生に向けた『メッセージ動画』を提示し

説明を行った。さらに質問を受け付け、受験の不安の軽減に努めた。

- 内容：(1) のリハーサルと同様の方法にて実施した。リハーサル時の課題に対して各領域の課題問題の長さを調整し改善した。また、学生が途中で課題を確認するために戻れることを事前に説明した。
- リハーサルからの改善点：令和2年度のリハーサル後の学生の感想、運営の状況を看護実践特別演習担当教員にて相談し、運営に関して以下の改善を実施した。
 - ・課題文の長さの調整：シナリオについてすべての領域で350文字程度（A4用紙に18ポイントで10行程度に収まるよう）に統一した。
 - ・課題の内容を忘れても、課題を確認してよいことを学生に周知を徹底した。
 - ・課題ブースの設置場所：成人・老年・精神演習室と基礎看護学演習室の2演習室（2室とも1つの階）にすべてのブースを収め、学生の動線を整理した。
 - ・講評はハイブリッド形式にて実施し、学生が自宅からも参加できるようにした。
 - ・総括担当者は、実施本部に留まることや、タイムキーパーのアナウンス内容の修正など、各担当教員の役割について修正した。

以下に実施の状況について写真を示す。（実施に関して課題の内容上問題のない範囲で示す。）



写真 5. 課題に取り組む様子



写真 6. 課題に取り組む様子



写真7. 課題に取り組む様子



写真8. フィードバックの様子

h. 評価：後期開講の領域別実習のためのオリエンテーション終了後に学生個人に、学生が受験した該当の2領域の受験成績と、模擬患者（模擬家族）からのフィードバックについて、e-learningを利用し返却した。受験成績には、領域受験生全員の平均得点も提示されている。

当日は、トラブルなく、スケジュール通りに円滑に進められた。受験後の感想として、リハーサル同様に「学生の自己の課題が明らかになった」「教員の暖かいフィードバックが嬉しかった」「楽しかった」等見られた。

受験評価表返却後、1週間を実習直前の自己学習期間として演習室の開放を実施したところ、利用学生は全学生58名のうち41名(70.7%)、延べ75名となり、1回以上の自己学習をする学生も認められた。

考察

令和2年からのCOVID-19の影響を受けたことにより、令和2年度から3年度における学生の学内講義や演習は、多くの限界や制約の中で実施している。各領域別の科目の演習回数や時間数は以前と比較して減少している状況もある。そのような状況の中で、令和3年度の看護学OSCEは感染予防に最大限に配慮しながら遂行し、学生も予定通り受験し、スケジュールも予定通りに進められた。この実施により、学生がこれまで積み重ねた自身の実力を確認するとともに、少しで

も自己の課題を明確にし、自己学習期間の演習室利用実績からも、看護技術の向上のために限られた時間をどう工夫し練習するかを検討に貢献できたと推察される。また、楽しく受験したという感想から、学生が安全・安心の得られる学習機会を提供していることについても確認され、学習のモチベーションに対する内的動機づけを高めることにつながると考えられる。このため、今後も学生の前向きな学習姿勢を獲得できるような工夫が必要であると考えられる。このような経緯から、今回の看護学OSCE実施は、学生がリラックスした雰囲気の中で受験し、学習のモチベーションを高めることを特に重要であると考えた。このため、思考・判断・技術力の課題の到達度の内容については、学生個人に委ねる結果となった。コロナ禍による演習機会減少も影響し、自己学習期間の演習室利用学生は多いと考えられる。今後、思考・判断・技術力、自己課題に関する到達度を含め評価を実施することが必要であると考えられる。

看護学OSCEは1日間で58名の受験を進める内容であり、時間に余裕があるとは言えない状況であるが、リハーサルによる改善点を反映すること、教員が事前にリハーサルを経験していることにより、円滑な進行が可能になったと考えられる。受験学生は緊張することが想定されるが、緊張を助長しない余裕のある雰囲気を提供することにつながっていたと推察される。さらに、評価方法について、今回は評価方法のバリエーションを持たせることよりも、円滑な運営に重点を置かざるを得なく、今後の検討課題は多い。本学看護学科において今年度実施したOSCEにおいて、「E」は、学生が自己の課題を明確にするということに焦点をおき実施していることから、ExaminationよりEvaluationとする方が適切かもしれないと考えられる。今後は、医学科OSCE、他の大学の看護学OSCE等を参考に、滋賀医科大学医学部看護学科らしい看護学OSCEについて模索し議論するなかで、検討課題となるように考えられる。

謝辞

看護学OSCE実施に協力を頂きましたボランティア学生の皆様、大学院生、模擬患者として協力いただきました方々に感謝申し上げます。また、看護学OSCE実施に深いご理解・ご助言を頂きました、医学・看護学教育センター伊藤俊之教授、松浦博教育担当理事に心より感謝申し上げます。

文献

- [1] 日本看護系大学協議会：「2021年度JANPU会員校数と設置主体別内訳」2021.
(https://www.janpu.or.jp/file/member_soukatsu.pdf ; 2021.11.22 取得)
- [2] 文部科学省：「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」2011.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kouto)

- u/40/ ; 2021.11.22 取得)
- [3] 厚生労働省：「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」2011.
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310qatt/> ; 2021.11.22 取得)
- [4] 文部科学省. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能

- 力」の修得を目指した学修目標～.1－59,2017.(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/cho usa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm ; 2021.11.19 取得)
- [5] 中村恵子編.看護 OSCE. 東京：メヂカルフレンド 2011.

Effective education to improve nursing skills from training to clinical practice

Report on the 2021 OSCE for Nursing

Namiko KAWAMURA¹⁾, Nobuyuki KITA¹⁾, Teruko YAMAKI¹⁾, Mikiko ITO¹⁾, Hiromi KUWATA¹⁾,
Yumiko TATEOKA¹⁾, Naomi MIYAMATSU¹⁾, Mayuko TSUJIMURA¹⁾, Mihoko OGITA¹⁾,
Yoshinari AIMI¹⁾, Masaya SASAKI¹⁾, Megumi KOSHIMIZU¹⁾, Sachi TUCHIKAWA¹⁾,
Ryo KATAYOSE¹⁾, Mizuki KAWAHARA¹⁾, Mayu SAKAMOTO¹⁾,
Yuka SUMIMOTO¹⁾, Sayaka TABUCHI¹⁾, Satoshi YAMASHITA¹⁾, Tomoko TSUDA¹⁾,
Maiko KIYOHATA¹⁾, Naoko TANIURA²⁾, Kenichi MUKAISYO²⁾

1) Education and Research Center for Promotion of the Medical Professions, Shiga University of Medical Science

2) Education Center for Medicine and Nursing, Shiga University of Medical Science